

鹿児島県工業倶楽部 新年大会

対談「明治維新から未来維新へ」

平成30年1月30日（火）

対談

庄内藩酒井家 18代当主 酒井 忠久 氏

鹿児島県工業倶楽部会長 岩元 正孝

コーディネーター

NPO全国街道交流会議理事 田中 孝治 氏

田中氏：今日の対談の主題は「明治維新から未来維新へ」ということでの対談でございます。まず、致道館というのは当時幕府は朱子学ですので、庄内藩が徂徠学というのをやってたというのは非常にある面珍しいなど、たぶん徂徠学というのは割と現実論で朱子学よりは非常に現実を重んじた学問だったんじゃないかなと。そういうことで今の産業に結び付くという意味で、土地の気風がどういう風に作られて、それが今にどういう風に伝わっているのかなというあたりから少しお話を伺えればなという風に思います。いかがでしょうか酒井さん。

酒井氏：徂徠学ということでお話を頂きましたけれども、確かに幕府は朱子学が主体でありながら、たぶん彦根もそうだったかな、徂徠学をとりました。でも、幕府の大枠には外れないように徂徠学をとったんだと思います。徂徠学をとったことは、やはり非常に今の時代にも合う様な徂徠学でしたので、実学として。非常に個性尊重と、それから短所はあまりよく見ないで、長所を伸ばせということと、ひとつは自習学習ということですね。自ら学ぼうという意欲がなければどんなに教えても無理だから、全部自主学習を主体にやると。だから先生は教えすぎにならないように、先生が質

問を受けても、たぶんどこが分からないんだって聞いた場合、ただ分かりませんではダメなので、どこがどう考えたけどどうしてもこの辺が分からないというこういう質問内容でないと答えなかったという風に言われております。そのように、是非自分で考えて、考えた上でやると。それからもうひとつは、お互いに議論をし合いながら、そして進路を測定していった。最初の段階では、小学生段階では職員室の傍にあって、手取り足取り教える訳ですが、その後は自主勉強で、自発的勉強を促進したということがよく言われております。そして先輩は後輩を教える、そういった事を繰り返してやったのが非常に良かったのではないかなという風に思います。例えばそこが活かされたのは、松ヶ岡の開墾に行って開墾する時に、ちょっと皆さん距離感分からないと思いますけど、今のお城から郊外の方に瓦を運んでいくという時にですね、実際に提案をしてリレー方式で運んだらいいだろうと。鶴岡から郊外までずらっと人が三千人位ずつですかね、千人位ずつですかね、並んで手渡しで渡したらいいんじゃないかという提案を受けて、そして実際に時間を測ってやってみたんですね、そしてこれだったらいけるということで、実際に鶴岡から車で約 15 分くらいのところまで人がずっと並んでやったんですが、どうも具合が悪いと。あまり効率が良くないということですから切り替えて、それで背負って歩くことにした。それでいまの経営に関してのノウハウの一番先端をいってたのじゃないかなという風に思う訳です。それはやっぱり、自分で考えて提案させて、そうしていくようにして、それでうまくいかなければすぐ別の案を考えるというのはそういった徂徠学の中で学んだことではないかなという風に思います。

田中氏：郷中教育は、どうも現代的で言ったらワークショップをやっている

たのかなという気がするんですけども、どうなのでしょう。

岩元氏：薩摩の郷中教育は今も大変取り上げられているけれど、今年の西郷さんの「西郷どん」もそのバックにあるのは、薩摩の陽明学だろうと思います。薩摩の陽明学っていうのは何かって言うと、「殺身成仁」、仁を成すためには生死を乗り越えるという事で、何か正しいことがあれば、そんなのに命を惜しんだってしょうがないだろう？だから先程の西郷さんの最期の話がありましたけれども、あれも西郷さんを貫いていたのが薩摩の陽明学。もうひとつは一生師として仰いだ斉彬の意志。この2点ですね、西郷さんはずっと動いていたし、薩摩の学舎につきましても、一旦決めたら後は言わない。だけど決めるまでは徹底して議論しろ。というのが郷中教育です。郷中教育の発祥というのは非常に残念なところがありました。秀吉の朝鮮出兵の時、約10年間に渡って薩摩は1万の兵を出します。ということは、1万人が薩摩を留守にしている。当時20万人と思われたところで、半分が男性だとすると、10万人の中の1万人がいなくなっちゃって、その他関ヶ原もあって男性の数がずいぶん減って、風紀が乱れたと。これは大変だという事で、風紀を締め上げるために、そういった郷中教育、それも先生がいなくて、年上の者が年下の者を教えるということをやっていたということですので、そういった意味では、薩摩の郷中教育というの発祥はちょっと非常にさみしいですけど、今の日本の教育を考えると、それなりに自分たちでやっていくんですから、素晴らしいシステムだったんじゃないかなという風に考えております。

田中氏：薩摩のそういう風土、あるいは気風というのは今にも面々と繋がっているという風に考えていいんでしょうか。

岩元氏：かなり難しい質問で。相当な時代まではそういう気風があったん

だろうと、だけどいっぺん切られるのが、西南の役、ここで切られてしまったと。あともう1点が、士族階級とそれ以外ということになりますと、大半の士族の人が鹿児島から出て行ってしまった。そういった意味で、じゃあ残っている人達は多少違うのかもしれないけれども、先程言いました薩摩の陽明学的で、気風・風土・心づもり。そういったものが、やはり相変わらず鹿児島には残っていると考えています。

田中氏：沈潜の風というんですかね、庄内の気風というのは、今でもやっぱり残っているという感じがしますか。

酒井氏：沈潜の風というとはよく間違えられるのですが、そこに沈んで黙って何もしない方がいいという風な意味に捉えられるのですが、実はそういうことではなくて、沈潜の風というのは要するに根を大事にするということなんですよね、ハッキリいうと。だから、そんな上に向いて花ばかり褒め称えてるんじゃなくて、根を大事にして、そしてじっくりとそういった実力を蓄えていくということがひとつの大きなあれだと思います。よく私が沈潜の風沈潜の風という風に言われるんですが、それはやっぱり自己反省を考えて、自分がそこまで及んでないよということで沈潜に成らざるを得ないのかもしれないけれども、実際は基礎をきちっと身につけてそういうことをやるのが大事だということだと思っています。

田中氏：やっぱり薩摩にしても庄内にしても現実論者が多かったのかなという印象を持つんですけれど。

岩元氏：もちろん現実が一番大事で、いくら理論理屈に走ったって何もできませんので、そういった意味では三現主義、それこそこの三現主義が、戦後の日本を世界に冠たるものにしてきたと思いますし、その三現主義の前には、日本の伝統的な産業というベースがあっ

たからですね、その上にまた三現主義が花開いたと思います。

田中氏：幕末の時にもたぶん、薩摩にしても庄内にしても、外の世界っていうのを非常によく見ていた土地柄ではないかなという風に思います。我々日本史を学ぶ時に日本中心で物事を見ますけれど、やっぱり世界史と一緒に見ないとなかなか全体が見えない。それから最近のようなこういう国際情勢の中で一時期言われた地政学というんですか、という言葉も最近なんか少し聞かれるのを考えると、先程の薩摩、それから庄内。どういう形で情報を得ていたのか。

岩元氏：はい、仰るように薩摩は、琉球経由で情報を取っておりました。その時 18 世紀は、オスマントルコが世界の覇権を持っておりました。オスマントルコがロシアとハプスブルク家から攻められまして、イギリスから借金をせざるをえない。そういった事で、オスマントルコが没落してくるのに合わせてヨーロッパが台頭していく。台頭してきたヨーロッパの、イギリスがインドをとる。続いて、中国を攻めます。これはアヘン戦争っていうのは、みなさんイギリスと中国の戦争だと思っているかもしれませんが、そこで戦争させられたのは、インドの傭兵です。イギリス人は自分たちの手を汚さないで、自分達が傭兵としてインド人を連れてきて、中国とアヘン戦争をします。もちろん、正義は中国にあったけれど、パワーがある方が強い。アヘン戦争の情報は、斉彬が知ってたという話がありますけれど、もちろん、中国の状況もですけど、当時そのインドの悲惨な状況についても、承知していたと思います。ヨーロッパは、当然インド・中国に続いて日本を植民地にしようとしています。ヨーロッパだけではなくて、ロシア・米国もやって参ります。ペリーが一生懸命日本を開国しようとした時に、ロシアの…ちょっと人の名前は忘れましたが、彼

はペリーの所に来て言います。「一緒に手を組んでやろう」。ところが、ペリーは自分の名前を歴史に残したいものですから、大慌てで、ロシアに先を越されては大変だということで、ペリーは日本に圧力をかけます。この時、国内の情勢はどうなっていたのか。3つですね、朝廷と幕府と藩。当時幕府は、絶大な権力を持っておりましたので、開国しようとしています。ところがそれに対して、幕府の中で、異論を唱える人が出てきます。それは朝廷の許可を取った方がいいんじゃないかと。当時朝廷の窓口は、九条尚忠。彼は、幕府から持ってきた案は全てイエスと言って受け取るので、朝廷の許可を取った方がいいんじゃないかということに関しては、安請け合いして、井伊は朝廷に持って行きます。ところが、反対側が、朝廷に手を回します。大原重徳。ここら辺が、手を回していたので、幕府から持ってきた開国の詔を、出さないようにします。これに腹を立てた井伊が起こしたのが、安政の大獄です。一連のやつを全部処罰して行ってガタガタになる。そういったことで、当時幕末の外部環境と内部環境、みなさんそれぞれの事情でそれぞれにやるのですけれど、大変な動乱の時代になっていくというのがこの時代の外と中の環境です。

田中氏：薩摩と庄内は西郷さんの話にありましたけれど、それ以前に船のルートで繋がってたんじゃないかなという気持ちがありますけれど、その、北前船が果たした役割。特に本間さんにしてもそうなんですけど、庄内ではどういう風に考えればいいのでしょうか。

酒井氏：北前船はほんと流通革命の最たるもので、前は琵琶湖を通過して陸路で陸揚げして取引していたものが、船で一度でいけるっていうのは非常に効率がよかったですと思いますが、西回り東周りはやっぱり海の関係で荒れたところがあって、どうしても行けなかった。だから西の陸路が非常に多様化されていたと思います。その中で、

やっぱりそれぞれの商業活動が盛んであればそういった薩摩やあちこちの取引もあったでしょうし、公にはなっていないかもしれませんが、あったと思います。ただ、やっぱり幕府とすればどうしても規制がありますので、例えば藩内だって橋を架けるとかそういったことは絶対にしなかったんですよね。道が便利でもやっぱり攻められたらそこはダメだから橋を架けるときは参勤交代の時だけ橋を架けたりしたとか、そういったことがやっぱりある程度守りもありましたから、その辺をどう捉えるかですか、情報は入手していると思います。うちの方にも地図がいっぱいありまして、単に庄内藩と言っても北海道から沖縄・九州の、それから会津はもちろんありますし、そういった後ろの方の強さとかそういったこともありますし、色々情報はそれぞれの藩で、主要な藩は握ってたんじゃないかなという風に思います。いまうちで一番あるのは、秋田と山形を合わせた、ほんと畳とかワンフロアくらいある地図があるし、そういった意味では、先生がいま言われたような色んな情報っていうのはある程度察知していたんじゃないかなと。私が一番驚いたのが、先程征韓論の中で述べましたけれど…征韓論じゃない遣韓論の中で述べましたけれど、西郷さんがものすごく世界情勢を把握していたということですよ。西郷翁が中近東からの情報を把握した上で、実際に庄内の黒崎が質問して、「征韓とはどういう事なのか実際の話聞かせてくれ」といったことで、ああいう話をされた。本来は西郷さんの思想にはもちろん韓国を征服するなんていう思想などは全然ないので、全くその通りだと思うんですけど、だからそういう意味でやっぱりそれぞれのルートで色々な情報ルートがあったんじゃないかなという風に思います。

田中氏：当時の薩摩藩、幕末の時の経済力というのは、どこから得たかと

いう風に考えたらいいんでしょう。

岩元氏：一点は、黒砂糖。さとうきびから作る砂糖による収益。それからもう一点はここで言うと、偽金を作っていたという話がございませので、そこら辺で、お金を作っていたのではなかろうかと。薩摩 77 万石に対してですね、徳川は一体何石だったのかと。表向きは、400 万石です。400 万石っていうことであれば、100 万石くらいの大名家が 10 軒あれば対抗できるはずなんですけど、実際は対抗できてないというところで、徳川の石高は表向きの 400 万石と違って、相当他にお財布を持ってたんだろうと思います。

田中氏：庄内藩の表高、実際の経済力って言うのはどのくらいあったという風に考えたらいいですかね。

酒井氏：譜代ですので、譜代にはちょっと甘いんですよ。石高が大きくなると賦役がそれだけ大きくなるので石高はできるだけ少なめにした方がいい訳なんで、実際は当時 17 万石、まあその倍はあったんではないかなと。でも新田を開発したときは税金を少し和らげたりしてましたから、その辺は農民にとってはよかったんじゃないかなという風に思います。

田中氏：集成館事業でイギリスから紡績機械を全部輸入しますよね。それが今の鹿児島県の工業に単純に繋がっているという風にみると、少し違えますかね。

岩元氏：そうですね、今年は明治 150 年で薩摩の明治維新に関する貢献ということで色んな人の名前が挙がり、斉彬の名前も挙げますが、斉彬の功績として普通に挙げられる分野以外のことで薩摩が貢献したことがある。それは何かって言うと、他の藩が、尊王攘夷の中で武器弾薬を作ろうとした時に、薩摩だけが、武器弾薬以外の物を作ろうとしました。斉彬は何を考えていたかと言いますと、紡績ですとかガラスですとか、そういったものを輸出することに

よって、外貨を獲得しようという構想を持っていました。これはたぶん薩摩藩以外ではないだろうと思います。そういったことで、その時の紡績の責任者でありました石河角太郎という人がおりますけれど、この人は、実はその後の絹織物の分野でも、全国を技術者として回ってる。島津の藩営紡績場というところみなさん全て鹿児島にあると思うかもしれませんが、島津は、原料の産地で尚且つマーケットである大阪の西南の方に島津の藩営紡績場を作りました。貝塚にありまして、これがニチボウの前身。ですから、島津自体の藩営紡績場はだめになりましたけれど、その後、ニチボウとして綿々と繋がって、日本の外貨獲得に役立ってきた。外貨獲得という意味でいいますと、明治時代には酒井さんがやっておられたシルクが最大の産業です。他の産業と比べて何が良かったかと言うと、加工産業であれば外国から何かをもってきて出さないといけませんけれど、養蚕業は、一切外部に外貨を流出することなく、産出したもので外貨を獲得できる。こういった意味で、日本の今日があるのも蚕様のおかげです。

田中氏：鶴岡の場合開拓された人が全部そこで居ずくんではなくて、目途が立ったら離れて行った人がずいぶんいるということと、それから、国とか社会に対して貢献しよう、これ言い方変えてみると汚名返上と頑張ったって言い方なのか、そこら辺は単なるいわゆる武士階級の救済策の殖産事業とはちょっと違った面もあるように思うんですけど、いかがでしょう。

酒井氏：最初に松ヶ岡の開墾場について、決してこれは給料をもらって開墾をしたんじゃないと、汚名を晴らすために、賊軍という当時の武士にとっては最大の恥である。それを晴らすために国に貢献して恥を晴らすと、そういうことでやったんだと。それが無ければ、三千名もの元侍がまとまるはずがない。まとまって、農業な

んてやれるはずがないということです。全くその通りで、やっぱり士気は盛んで、たぶん競争の原理を取り入れて、その開墾する組織を 29 組挙げて、そしてお互いに競い合わせながらやる。まさに戦場と同じ様で、お互いに斥候を出してどっちが早く進んでいるか、どっちが上手くやっているかというのをやってたという話があります。そういった中で、確かに三千名があそこで開墾に従事したとしても、その地域だけでは職を得て、そこで生活することはできない。当然農村ながらそこから後は金融機関、第 6 7 国立銀行を作ったり、あるいは今酒田市にありますけれど山居倉庫。それに行ったり、あらゆる所に行って活躍するという形になります。松ヶ岡の開墾場から派生したのは、シルク産業ですね。シルク産業が派生して、当初はお茶もやろうとしました。そして静岡から職人を呼んでやりましたけれど、残念ながらお茶の北限が村上までだったので産業化はできませんでした。その静岡から来た人は遠州屋さんといって、今お菓子屋さんをやっています、そういう形で定職しています。そして松ヶ岡が始まって、生糸そして蚕の種、そして織物。それぞれ分野が違いますが派生は一緒なんで、最初それぞれ独立してやりましたけれど、いまは全部合併して松ヶ岡一本でやっています。そして、製糸だけではやっていけない、これから派生して必ず 2 本、3 本の柱を持たなければならないという事で、ナショナル電気やエプソンさんとかの電子産業をやったり、色々な事をやりました。ですから、本来はシルク産業で生糸を取るのには原料を要する訳ですから、農業のようなことをやるんですね、養蚕農家を相手にして桑を育てて蚕を育てるということをやる訳ですけど、そういったことを含めてやってきた人が、いつの間にか最先端の方のエプソンとかナショナル電気のものをやったりできるようになっている。人間の能

力というのは凄いものだなとほんとつくづく思いました。それでも今はそれだけじゃいけないので、いま航空機産業とって、ボーイングの787のものを手がけて、それでいまほとんどそちらの鶴岡工場でそちらの方をやっておりますけれど、そういった形でどんどん変遷して行って、ただ人間の多様性っていうのはすごいなと、何でもできるんだなという風に改めて感じました。それはそういうことがあれだという風に思いますけれど、人間の能力っていうのは計り知れないものだということを感じております。以上です。

田中氏：集成館から始まって軍事産業だけではなくてですね、民生品を全国の中では先に手掛けたというひとつの物づくりの風土っていうのが現在どうなって、それが将来どういう風に展望できるのか。あまり鹿児島の方は、大きな法螺を吹かないという事のようにですけど、少し将来を展望してお話していただけると有難いんですけど。

岩元氏：今回のテーマは、明治維新から何を学べるかということですけど、明治維新が大変大きな動乱であったということは確かだろうと思います。豊臣秀吉が、国書を対馬に持っていかせます。使者は、そのまんま国書を持って帰ります。渡すべき相手がいなかった。その国書はいま前田家が所蔵しているそうです。幕末に日本に来た各国は、将軍に国書を渡そうとします。幕府は受け取りません。ペリーは、こういう事を言います。「明日は我が国の大統領の誕生日だから、江戸湾で祝砲を撃つ」。鹿児島湾と江戸湾は同じサイズで、もし鹿児島湾で祝砲を撃つということであればどうってことはなかったけれど、江戸湾の方が、薩摩より遥かに砲台が少なくて手薄。そこで大砲をぶっ放されて、仕方なく国書を幕府が受け取ります。受け取った挙句に言ったのが「本件について

は朝廷にお伺いを立てなきゃいけない」と言われて彼等は驚愕する訳です。今までこの国の代表だと思っていた人が違うのか。これが一連の大きなごたごたの始まりです。じゃあ、今日現在、世の中ごたごたしているのかどうかという見方なんですけれど、それぞれ平穏だと思う人もいるかも知れませんが、実は明治維新の時に遜色がないくらいごたごたしている社会なのかもしれない。何を言っているのかと言いますと、中国に行きますと 10 円か 15 円で自転車に乗れます。なので、GPS とアプリがあればそれで自転車に乗れます。10 円か 15 円で自転車に乗れる時代と、1 万円出して自分で自転車に乗らない時代では、1000 分の 1 のコストです。A さんと B さんが対談する。A さんに 10 人の秘書がいてですね、それぞれ 10 時間かかって資料をまとめる。B さんは AI を使って資料をまとめる。それで対談したとします。A さんの場合は少なく見積もっても、対談するために 100 万のコストを費やさないとはいけません。B さんも AI を使っているのでいくらかコストはかかっているが、とても 100 万じゃない。そうすると、今をどういう風な動乱と捉えるか、今言った中国のレンタルの自転車、あるいは AI を使いこなせる B さんとそれ以外ということであれば、これは今は大変大きな歴史の転換点に立っている。従来のようなやり方をするという人と、そこを積極的に使っていくという人では、物凄く大きな差がついてくるんだろうという風に思います。戦後、日本が戦争に負けた時に、「鬼畜米英」と言っていたのが、「Give me chocolate」に変わりました。「尊王攘夷」と言っていたのが、「散切り頭をぽんと叩けば文明開化の音がする」と言いました。この先輩たちの変わりようの潔さ。いま我々が IT、AI、GPS、バイオ、それからマイクロの世界。こういったものに対して、そこまでの潔さを持って食っていけるかどうか。

それが今我々が明治維新から学べる、先輩の潔さを学ばないといけないポイントじゃないかなという風に考えています。

田中氏：結構全国のお殿様と機会があってお話をするとですね、非常に地域振興に熱心な現代のお殿様が結構いるなという風に思うんですけど、酒井さんそのお殿様の地域づくり連合みたいなというのはどうなのでしょう。

酒井氏：実は私の妹の主人がトヨタ自動車にいまして、トヨタを途中で辞めてから九州のアルバック精機の社長でずっとおりまして。いまでも薩摩大使ということしております。非常にそういうことで縁を感じておりますが、実はあの先程話した松ヶ岡の話が精密機械、花王石鹼とかそれに向けてやっている時に、これもご縁だからなんとかご縁を使おうという事で、アルバックさんからたぶん不要の機械とかそういったものをこちらに譲ってもらえないかということで、なんとか鹿児島から山形のあそこまで持ってくるのに大変な苦勞をした、そういう思いがあります。そういうことから、たぶん日本全体から見れば、地域とか何とかいうんじゃないくて、縁があるところはどこでも手を結んで、是非強固な連携の元に世界を相手に戦いを挑むのが筋じゃないかなという風に思っているところなんですけど、ぜひそういう意味で鹿児島さんからは色々いつも助けられているので今後とも宜しくお願いしたいと思います。そしてやっぱり今これからコンピュータ時代になっていくと、いまビットコインの話もありました、将来銀行いらなくなるんじゃないかというぐらいに思っている時もあったんですが、ビットコインの話もありますし、将来的にはどういう風にするのかというほんと計り知れないのがあります。ただやっぱりコンピュータから人間が作られてはしょうがないので、人間がコンピュータを作らなければいけないということを考えれば、ヨー

ロッパ・アメリカは根底にしっかりとした哲学を持ってやっける訳ですので、それは是非西郷南洲翁遺訓なりそういったものをきちっと読んでですね、根底にそれをしっかりと据え付けて、そしてコンピュータを駆使する、あるいはそういった最新の兵器、どんな変化でも応じられるようなこれからの時代に対応していかなくゃいけないんじゃないかなと私はそう思っているところであります。ちょっと余計なお話をしましたけれど、アルバック精機さんに大変途中お世話になりましたして、そして未だに薩摩大使ということであちの妹の主人に…私より年は上ですけど、毎年鹿児島に来るのを…鹿児島に来るといふより飲みに来るのを楽しみにしているところでございまして、今後ともよろしくお願ひしたいと思ひます。

田中氏：いま酒井さんからお話ありましたけれどせつかく南洲翁遺訓のご縁というのもありますのでね、山形と鹿児島のごくこうだったということも大事なんですけれど、やっぱりそれを踏まえて先程言ひましたように将来見るとやっぱり新しい交流の仕方っていうのがあるとはなないかなという風に思ひんですが、もしその辺のお考えがありましたらちよつとご披露いただけたら…

岩元氏：すごく連携が大事だということをおかれて、今日は酒井さんのお話を聞いておりましたして、庄内のベンチャーの会社が出てまいりました。恐らく会場におられる方で、あのベンチャーの会社と連絡取つてみたいなという方も出てきていると思ひます。イギリスで産業革命が起きましたけど、どうしてイギリスで産業革命が起こつたのかと。いくつか理由があるが、ひとつの理由は、ヨーロッパの中でイギリスは一番生産性が低いところでした。生産性が低いという事は、よろず、何でもかんでもヨーロッパの大陸よりも高かついてる。そうするとそのハンディを、どうしてもイギリス

スは超えないと大陸に対抗できないという事で、機械化を進めていきます。今日現在鹿児島も、他の地区に比べて生産性があまり高いようには感じません。高くない、逆にそのことがハンディで、そのハンディを、どうやったら克服できるのか。いま言ったその克服するために、工業倶楽部の中での連携もあるでしょうし、山形ですとか静岡とか、連携を通して低い生産性を上げていくのをどうしたらいいのかなということ、考えるのが今日こうやってみなさん集まっていたいただいた事の成果になるんじゃないかなという風に考えております。

田中氏：今日工業倶楽部で静岡もそうですし山形もそうですが、やっぱりものづくり、どんな IT の時代になってもですね、例えば宅配便にしても、伝票とコンピュータで色んな決済ができるようにしても、最後はトラックで運転手さんが物を運ぶということがついてく訳ですから、やはり物を作るという、情報が知恵で何かができるということでも最終的には形になる物を作ってくつていうことは永久に失われないということでもあるので、私どももモノづくりということへ基本に従っていくつていうことは変わらないし、先程歴史的な縁もありますので、せっかくこういう機会です、静岡も混ぜて頂いていることですので、できましたら具体的なテーマを見つけてお互いがプラスになるような連携にもう一歩進められれば大変有意義なことになるのではないかなという風に思います。たぶんおふたりとも話し足りないなという部分で終わってしまったのかもしれませんが、時間が来ましたのでこれで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。